

ぎふの教育

岐阜県教育懇話会
〒503-0023
大垣市笠木町229-5
(0584)91-2478
口座番号 00800-3-5390

綱 領

、われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
、われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
、われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

巻頭言

W・E・グリフィスの観た
明治の「皇國」日本

後藤真生



明治の日本のために尽力したお雇い外国人が数多くいた中に、William Elliot Griffiths (グリフィス、写真)がいる。

グリフィスは、今から一五〇年以上前、明治三年(一八七〇)の末に来日したアメリカ人教師である。お雇い教師として教育活動に尽力する一方、明治維新期の日本を体験し、観察して、日本研究にも力を注いだ。帰国後は教師になったが、日本の歴史や文化に関する研究を生涯続けた。明治九年(一八七六)に、『The Mikado, s Empire 皇國』(以下『皇國』)を出版した後、日本に関する著述や講演を精力的に行っており、多作な知日家として知られる。では、グリフィスは日本についてどのように考えていたのだろうか。

今回は、彼の代表的な著作などを繙き、グリフィスが観た明治の日本や日本人について紹介する。

グリフィスは、一八四三年(天保十四年)にアメリカのフィラデルフィア市で生まれ、ラトガーズ大学に入学する。彼は在学中の頃から、グラマースクールや大学で、日本人留学生に英語、化学、物理などを教えていた。そこで出会った日本人は、横井小楠の甥や福井藩士の目下部太郎などである。その縁が一つのきっかけとなり、彼はお雇い教師として福井藩に招聘され、明治三年(一八七〇)に福井藩の藩校や大学南校(後の東京大学)で教鞭を執り、同七年に帰国している。廃藩置県の前、グリフィスが当時一流の日本人の知遇を得て日本の歴史を知り、各地の実情を見聞したことや、明治天皇に拝謁する機会に恵まれたことは、注目すべきである。

グリフィスは日本滞在当時から、日本人の学者や学生などの協力を得て、日本の研究に着手し、将来の著述のために準備を行った。彼が帰国の前後に書き留めたものを一冊の大

著にま
とめ上
げたの
が、十
二版ま
で改訂

を続けた主著『皇國』である。グリフィスは「日本の上き通訳者たらん」と決意し、帰国後、生涯にわたり、欧米諸国に対して日本を紹介する著述活動に尽力している。

この『皇國』は二部構成で、第一部は日本の歴史について、第二部は日本におけるグリフィスの体験や観察について述べられている。本書の背表紙には、「The Mikado, s Empire」という英語の書名と共に、漢字で「皇國」と刻まれているが、ここに、彼が日本という国をどのように捉えたかが、よく表れている。

グリフィスは言う。「この国の人たちの八年間の生き生きとした接触を通して、私はその言葉、書物、習慣から、日本人との精神的な相違を見定め、日本人の思想、感情を知ることにも努めてきた」と。彼はこのような考え方で、膨大な資料を用い、個人的な体験や観察、研究に基づいて、「偏見なしに好意を持って、大日本現在の過去を探究する」ことに努め、「この本を家の書齋ではなく、主に皇國の土の上で書いた」。すなわ

ち、日本の歴史や文化を探索し、明治の日本の姿を観た上で、日本は「The Mikado, s Empire」(「皇國」)であると一言で表現したのである。

グリフィスの他の著作のうち、注目すべきは、『The Mikado, s Empire』である。明治天皇の崩御後、大正三年(一九一五)に出版された本書は、日本の歴史や明治の日本、明治天皇に関する様々な事柄について、グリフィスの見解が率直に書かれている。

グリフィスは本書で、明治天皇が日本の「真の統治者」であり、「国事を双肩に担い、休みなく勤勉な生涯を送った」と述べる。また、明治天皇に何度か謁見を賜り、研究を重ねた結果、「現代における真に偉大な人々の一人だと考えるようになった。彼がいなかったならば、日本は現在のごとくに、また世界が今日認めているのごとくに、決してならなかったであろう」と、敬愛の念をもつて書き綴っている。

これらの著作の中で、グリフィスは他にも、日本の多様な側面、政治、教育、宗教、言語、民話、風習などを描き出している。それは、歴史書、旅行記、随筆、研究書の性格を持ち、比較文化的な視点が随所に見られ、興味深い。

本講座では、その一端も紹介した上で、日本学的な考察を加えたい。

時論

天皇の御養育に貢献した

岐阜出身の丸尾錦作先生

京都産業大学名誉教授 所 功

「帝王学」の多様な在り方

この二月二十三日、今上陛下は満六十五歳のお誕生日を健やかに迎えられる。国民の一人として、心からお慶び申し上げたい。

ただ、古代から実施されてきた當代一流の碩学（せきがく）による継続的な「帝王学」は、戦後ほとんど行われていない。それを補うため、今上陛下は学習院中等科生の頃から上皇陛下のご意向により、東宮御所へ専門家を招き「皇室の歴史」などを受講して来られた。

とはいえ、戦前までのような皇子たちに対するご幼少期からの特別な教育は、絶えて久しいことを、今あらためて考え直す必要がある。そのためには、まず往事の実例を具体的に解明しなければならぬ。そう思い立って宮内庁編『昭和天皇実録』（既刊）を丹念に読み返した。

それによって知りえた注目すべき人物は、大正天皇と昭和天皇のご幼少期に御養育掛の責任者として献身した丸尾錦作先生にほかならない

（以下敬称を略し「丸尾」と記す）。丸尾錦作の懸命な刻苦勉勵

丸尾錦作（一八五六〜一九二五）については、ネット情報などにもかなり詳しい記事が出ている。その大半は、昭和四十四年（一九六九）出身地の岐阜市加納町有志たちが、顕彰碑を建立する際に作られた記念冊子『澄心』所載の「自叙伝」に依る所が大きい。

この冊子を橋本秀雄氏が岐阜市立図書館で見付け、そのコピーを送って下さった。ここにその「自叙伝」と遺族関係者の記述から、丸尾の主要な事績を紹介させて頂こう。

丸尾の父広重は、加納藩の下級武士（三百石取り）、母時子は同藩士根村三四蔵（みよぞう）の次女で、その間に安政三年（一八五八）四月、長男として誕生した。教え八歳ころ、母上より「百人一首」や「いろは」の手習い（習字）を教えられ、十二歳ころから藩学の憲章館で読書、講武所で剣術を修め、儒者の三宅在平から漢学・皇学を学んでいる。

やがて、慶応四年（明治元年）一八六八）十三歳ころ、藩の奉行吟味方で給仕として勤めながら、文学で身を立てようとした。同五年の学制頒布により創立された加納町の小学校で助手となり、大垣に開校された師範学校で修学し、十八歳から三年

間、加納成物小学校の教員を勤めた。しかも、同十年（一八七七）節約のため徒歩で上京し、千代田学校の教員をしながら、性慎義塾で英語と数学を修め東京師範学校に入り、三年間首席で通している。

このような刻苦勉勵が実り、同十四年（一八八一）『華族学校』（学習院）の助教授に採用され、寄宿舎の温習教師と学生監も兼ね、「生徒の修養に努力し・・・品性陶冶（とうや）に尽力した」。しかも五年後（十九年）二十三歳で九州の旧松浦藩校地に開設された猶興館中学へ招かれ、三年間斬新な教育に専念している。

皇子嘉仁親王（大正天皇）の御養育
ついで、同二十二年（一八八九）三十一歳で学習院へ教授として呼び戻され、皇太子明宮（はるのみや）（大正天皇）の御用掛を仰せ付けられた。前任の湯本武比古が皇族に関する教育研究のためドイツ留学に出た後任である。

大正天皇（明宮嘉仁親王）は、明治十二年（一八七九）八月三十一日、天皇（27）と権典侍柳原愛子（なるこ）（24）との間に誕生されたが、幼少時から病弱であった。

そのため、青山の御所内の御学問所で個人指導を受けてから、学習院初等科に入られたが、中等科一年で退学された。しかし、他の皇子が生

後まもなく夭逝されていたので、唯一の「男系男子」として、十一歳で皇太子に定められた。

その御養育には、ご健康の回復と仁徳の修行を、東宮御所などで注意深く行われなければならない。その大任を担ったのが、小中教育の現場経験が豊かな壮年の丸尾である。

この丸尾がどのように御養育役を果たしていたかは、彼が大正年間に書いた「自叙伝」に、嘉仁親王の立太子後「夏冬の間は、多く熱海又は三保清見寺等に御旅行あり、同地に在りて御教授申し上げ。」（先帝陛下（明治天皇）の教育に関する御留意は・・・余の御教育掛拜命に際しては、特に皇太子の御教育に関しては元田永孚（明治二十四年一月逝去）に聞き正せとの御言葉あり、時々同氏に御教育に関して相談せり・・・）と記すにすぎない。

しかし、実際には相当厳しかったと伝えられる。前掲『澄心』所載の六男令策氏（杉浦家に養子）寄稿文「父を偲びて」に、「父は意志極めて強固・・・厳格な態度で事に臨んでいた」一例として、「大正天皇が東宮（皇太子）時代、父の出した宿題が馬術稽古のため出来なかつた言い訳を、自筆でお書きになった親書（直筆）が「今も家宝として保存されている」とみえる。

皇孫裕仁親王御養育掛兆の実績

「病弱な少年皇太子は、この丸尾だけでなく、明治三十一年（一九〇九）から「東宮賓友（ひんゆう）」に任じられた有栖川宮十代威仁親王（一八六二〜一九一三）の努力もあって、段々と健康になられた。

おかげで、同三十三年五月、九条節子（さだこ）（道孝公爵四女）と結婚されて、翌三十四年（一九〇一）四月二十九日に第一皇子裕仁（ひろひと）親王、翌三十五年六月二十五日、第二皇子雍仁（やすひと）親王を儲けておられる（同三十八年一月に宣仁（のぶひと）親王、十年後の大正四年十二月に崇仁親王も誕生）。そこで、裕仁親王と雍仁親王は、お誕生直後から明治天皇の信任篤い川村純義伯爵に預けられたが、川村の逝去により青山の皇孫御殿へ戻られた。それから一年余り、両親王の御養育にあたったのは、東宮侍従長の

澄心静慮

丸尾錦作書額（加納小学校蔵）

の木戸孝正（孝允の養子）である。そのころ、丸尾は有栖川宮威仁親王と同妃とに従ってドイツ皇太子の結婚式に参列し、イタリア・フランス・オランダ・ベルギーおよびイギ

甲子孟夏
錦作

リスを訪ね、各国の教育状況を視察している。そして帰国すると、翌三十九年九月（日露戦争直後）、木戸に代わり丸尾が皇孫（両親王）の「御養育掛長」に任命された。

それ以降、丸尾が懸命に奉仕した実績は、宮内庁編『昭和天皇実録』（東京書籍、平成二十九年から刊行、全十八冊）の第一に、かなり詳しく記録されている（その原文抄出稿は、HPかんせいPLAZAに掲載）。

たとえば、明治二十九年（一九〇六）六月、皇孫裕仁親王（5）が同令の「御相手」と遊びながら覚えられた「此ヤツ」「ヤイ」「ウン」などの乱暴な言葉使いをされるのに対して、丸尾（49）が、「御使用を慎むべき旨を言上」した。しかし、すぐ直されなかったのか、翌四十年正月、丸尾らにご注意申し上げた時は「暫く御こらへ（我慢）あそばして御聞き」になるよう言上している。

また、同四十一年（一九〇八）四月、学習院初等科に入学された裕仁親王に対し、丸尾は折に触れて「水戸光圀を題材として訓話（翌四十二年三月）、「教育勅語に関する訓話」（翌四十三年正月）、「前九年前三年の役の小話」（同年八月）などを申し上げると共に、「海軍将旗」や「世界一周双六」のお相手をしたり（同四十二年十月、同四十二年正月）、ご幼

少時から興味を持たれた昆虫の勉強に資するため、岐阜市から「名和昆虫研究所」の名和靖所長（53）を招く（同四十三年十二月）など、さまざまな努力をしている。その御養育態度は、相当に厳しかった。

『実録』には第三年級の三学期末（同四十四年三月）、裕仁親王（10）に対して、丸尾が『大学』の一節「身を修むるを以て本と為す」の講話をするのみならず、「御成長に伴ひ：：ことなど、種々訓戒」を申し上げたとある。しかも、たとえば、庭遊びで夢中になって帰りが遅くなられると、「時間をお忘れになるとは何事ですか。うちへお入れしません」と叱り、しばらく仁王立ちしていたと伝えられる（河瀬弘至氏『孤高の母后貞明皇后』（産経新聞社、平成三十年）

皇子御養育掛長から宮中顧問官に明治四十五年（一九一〇）七月三十日、天皇（60）が崩御され、直ちに皇太子（33）が踐祚して大正天皇となられた。それに伴い丸尾は「皇孫御養育掛長」に任じられ、一ヶ月半後の九月十四日、先帝の大葬儀に参列した。その夜、陸軍大将（前学習院長）乃木希典（63）は静子夫人と自刃したが、翌日、丸尾から「自刃の旨」と「辞世（遺詠）」を申し上げたところ、裕仁親王は「御落涙」

されたという（『実録』）

また、これを機に皇嗣（皇位継承者）の裕仁親王と、弟君の雍仁・宣仁両親王とは、「御殿を別」とされることになった。そのため、丸尾は双方の連絡役も務めている。京都へ修学で行啓の際には、大覚寺で「南北朝和睦の話」を申し上げている（大正二年四月二日）。

さらに、大正三年（一九一四）春、裕仁親王（13）が学習院初等科を卒業され、特設の「東宮御学問所」（七年制）へ進まれたので、丸尾は御養育の傳育官長を辞し「宮中顧問官」を仰せ付けられた。

それゆえ、東宮教育に直接関与することはなくなったが、以後十年近く折あることに参殿して、皇太子と親しく「御欽談」に及び「御陪食」も賜っている。

この丸尾は今から丁度百年前の大正十四年五月四日、満六十九歳で他界した。杉浦令策氏の寄稿文によれば、「晩年の父は、仏道に関心を持ち、また好きな囲碁・撞球（ビリヤード）を楽しんで暮らし・・・赤坂離宮の見える紀尾井町の家で静かにその生涯を閉じ」たと記されている。

当時の心境と信条は、大正十三年（甲子）揮毫の「澄心静慮」（心を澄まして静かに慮る）によく表されていると思われる。

—追悼—

第七代会長山口三男氏の



逝去を悼む

本会の前会長山口三男氏が、闘病中の一月三十日午後十一時過ぎ、逝去されました。満78歳でした。

山口氏は平成二十三年に後藤悦男氏の後を継いで第七代会長に就任し平成三十一年までの九年間を務められました。長年のご尽力に感謝を申し上げ、御冥福をお祈りします。

岐阜県教育懇話会役員一同
令和七年二月二日

山口三男前会長を偲ぶ

後藤章嘉

山口さんは、昭和二十一年三月、垂井町に生まれ、東京五輪の時、中央大学法学部に入学されました。その後、慶応大学大学院に進み、中村菊男教授の指導の下、「GHQの神道指令」を研究されました。

山口さんは、日本の国は天皇による君主制民主主義国家と考えてみえました。明治維新は幕末の志士たちが国際社会で独立国家として生き延びることを目指したものです。開国をして、文明開化・富国強兵・殖産興業

を推進したのは当然である。米国の戦争は、その反日政策と経済制裁で開戦に追い込まれて起きた。終戦は、昭和天皇の御聖断と国民が承諾必謹を守ったおかげで、戦後、経済は復興したが、復興しなければならぬことが多いと語っておられました。外交と政治に志をもち、法律学を志したとも述べてみました。

また、五箇条の御誓文は、天皇が神様や御先祖に誓われたもので、昭和二十一年正月、昭和天皇が渙発された勅語は、五箇条の御誓文を示されたものとされました。つまり明治維新の精神で祖国復興の先頭に立たれたのだと教えてもらいました。

卒業後、郷里に帰り、林業を手伝われたのは親孝行のためでしたが、三十九歳で、念願の政界進出を果たされました。県議を九年務め、その間、教育が大切だとして益田郡の米野議員や高校の恩師稲川先生と協力をして、小中学校で愛国心と国旗・国歌の指導をしっかりと、学校行事に国旗を掲げること、道徳教育を充実し、学力をつけることなど、県下の教育の改革を求められ、教育基本法に愛国心を育てる文言を入れることを主張されました。

折口信夫は、日本には古来「まれびと」が来て、集落や個人に幸福をもたらすという信仰があり、それを

神様としてきたが、私にとって山口さんは素晴らしい事をもたらしてくれた大切な存在でした。

学生時代からの山口さんご厚情に感謝をし、ご冥福をお祈りします。

先輩に哀悼の誠を捧げます

橋本秀雄

山口前会長は、私の高等学校の二級先輩でした。高校を卒業され、サークルのOB会でお目にかかったのが最初でした。慶応大学大学院出られ、大垣の矢橋林業に務めておられる頃で、笑顔と滑らかな弁舌が印象的でした。

大学院で育んだ志から、政界に入られました。政治的にはリベラルと保守の両面をもつ実務派ではなかったかと思えます。政界を引退してから、いくつかの会社に務め、調整役として活躍をされたと聞きます。

平成二十三年、先輩に会長就任を受けていただけ、会員増加などの課題を指摘されましたが、事務局の力不足で、十分なお力になれなかったことを残念に思っています。

その課題を、私が引き継いでいくこととなりました。日本人の育成という教育の本筋を見失わないよう、本会の役割を發揮すべく、努力していくことを、山口前会長の霊前にお誓い申し上げます。(二月四日記)

微風列風

小中学校の保護者から、給食が大変なことになっていると聞きます。管理栄養士さんの栄養価確保の奮闘にかかわらず、子供の給食は貧弱になっていると。決められた給食費では物価高騰に耐えられないのです▼お役所の食育の掛け声はどこにいったのでしょうか。子供にとって給食は、学校生活のなかでは大事な楽しみのはずです。家庭の食卓には見られないメニューもあります。今、子供たちは不満を口にするのではなく給食時間待っています。不憫とはこういうことでしょうか▼学校給食は、欠食児童といつて、昼食時間になると教室を出て片隅で友達と昼食が終わるのを待った子がいた頃に始まりました。当時、一日三度の食事のうち一回だけでもバランスのとれた食事を提供しなければ、との思いで人生を給食に注いだ文部省の高官がいて、当時、珍しいマカロニを給食に導入しようとした。要請を受けた会社の社長が、子会社のマカロニ製造会社の課長にその採算を聞くと、赤字で無理との回答でした。社長は即座に言いました。「子供のためだ！」と。その結果、給食にマカロニが出るようになりました。社長は現上皇后様の父君です。天皇陛下の周りには、国民に寄り添い、人々と共に、との心が生きています。Y